

テクノロジーと商業主義とメルヴィル

西川 栄子

H.メルヴィル (1819-1891) の主著『白鯨』(1851) の中でエイハブ船長が自分の四分儀を見つめてつぶやく場面がある。

「ええい、^{たわ}誑^{おもちゃ}けの玩具！ 赤ん坊の遊びもの！ (略) 世界はきさまのことを、あやし^{はかりごと}い詭^{ちから}略と権能があるというて、だぼらを吹きおるわ。だが、所詮、きさまになにほどのことができようぞ？ ただ、あわれ儂き、この一点を示すだけではないか。たまたま、きさまがこの広大な遊星上のそこにきておって、きさまを統^しろしめす存在者の手も、そこに伸びていた、ということだけではないのか？ そうよ、ただそれしきのことではないか！ (略) きさま四分儀よ、きさまなんか呪われてしまえ！」⁽¹⁾

メルヴィルはエイハブの口を借りて、航海には欠かせぬはずの四分儀を呪い、痛烈に罵倒する。四分儀に代表される科学に作家がこれほど批判的なのは何故だろうか。本稿ではメルヴィルの二つの短篇集、『ピアザ物語』(1856) と『林檎材のテーブルその他の物語』(1922, 死後出版) の中から、「コケッコー！——気高き雄鶏ベネヴァンターノの美声」(以下「コケッコー！」と略)、「お目出度い失敗——あるハドソン川の物語」(以下「お目出度い失敗」と略)、「避雷針売りの男」, 「独身男たちの楽園と乙女たちの地獄」(以下「乙女たちの地獄」と略)、「鐘塔」の五篇⁽²⁾を選び、それぞれの物語を紹介しながらその中に投影されるメルヴィルの科学への態度を明らかにしてみたい。

『白鯨』と『ピエール』(1852) の長篇に精力を注いだ後に書かれた小品「コケッコー！」では一人称の語り手「私」なる人物が塞ぎの虫にとりつかれ、不眠に悩まされる。ある早朝、牧場へ散歩に出掛けて山頂近くの丸太に腰かけながら黙想にふけり、現世の不条理を嘆く。突然、高らかな鶏鳴が響き「私」は意気消沈から蘇える。その雄鶏をさがして歩き回り、ついにメリマスクという貧しい男が飼っていることがわかるのだが、メリマスクは「私」の雄鶏を買い取りたいという懇願を拒み続ける。極貧の中で彼の妻子は次々と病死し、

「トランペット」と呼ばれるその雄鶏は主人の死を見届けると、最後に霊的なひと声を放ち息断える。「私」は石碑を建てあつく葬ってやった。以後、「私」は朝夕「コケッコー、オー、オー！」と雄鶏の鳴き声を発している。

以上があら筋であるが「私」の憂鬱病の原因が現世の不条理、ことに当時の文明の利器たる機関車、汽船に向けられていることにまず注目したい。メルヴィルは時代の象徴ともいえる鉄道の事故で亡くなった友人や事故の犠牲となった30人余りの同乗者に心を痛み、交通機関による最近起った事故に憤激を覚える。

惨めな世の中だ！ いつまで待ちつづけられるか分からないのに、誰が、こんな世の中でわざわざ財産づくりをしようと願うものか。鉄道や蒸気船、その他この世の人命にかかわる事柄を管理する何千もの悪漢や愚か者どもにくれてやるようなものではないか。…… (略) ……

時代の大きいなる進歩だと！ 何ということ！ 死と人殺しを促進するものを進歩と呼ぶとは！ 誰があんなに速く旅したいと思うものか？ 私の祖父なんぞは、そんなことを望まなかったし、それでいて決してバカなんかではなかった。聴け！ ほら、例のドラゴン^{ドラゴン}がまたもやこっちへやって来る——あの巨大な虻^{あぶ}のようなモロクの奴めが——蒸気を吐き！ 煙を吐き！ 汽笛を鳴らし！——駱駝の背に跨って駆ける真性コレラのように、この緑の森を突き貫けてまっしぐらにやって来るわ。わきにどけ！ こちらにやって来るぞ、あの公認の人殺しが！ 死を独り占めにする奴が！ 彼奴^{きやつ}は判事、陪審員、絞首刑執行人等の役を一手に引き受け、被害者はいつも牧師の恩恵を受けることなしに死んでゆく。二百五十マイルにもわたって、あの鉄の悪鬼は「もっとやれ！ もっとやれ！ もっとやれ！」と叫び、喚きながらこの土地を横断してゆく。願わくは、五十もの山々が共謀してこの悪鬼の頭上に崩れ落ちてくれんことを！⁽³⁾

機関車を「駱駝の背に跨って駆ける真性コレラ」「公認の人殺し」「鉄の悪鬼」と呼びもし自分が「北米の独裁者」になれるなら、それらの関係者を「縛り首にして引きずり回し四つ裂きにし」あげくのはてに「地獄のかま^た焚きにしてやる」と容赦ない悪口雑言を吐くのである。機関車のことを「現代の典型——活動と活力の象徴——大陸の脈博⁽⁴⁾」と讚美し、その汽笛や蒸気を心楽しいものと感じたホイットマンと、ヒステリックなほどの呪阻を浴びせるメルヴィルの批判的な態度は対照的である。

「私」の不満は文明の利器だけにとどまらない。同時代の無邪気で無知な商業主義にも「私」の怒りは向けられる。教会にまでつきまとい、礼拝中に「私の鼻先きまで請求書を突

きつけてよこす」⁽⁵⁾借金取りの傍若無人ぶりを金銭欲の権化と考える。魂の救いを求める場である教会の中でも、「私」は安堵できない。メルヴィルは自己を「私」なる語り手に投影させることによって苛酷な現実を凝視し、人生の非情を憂える。「人間がこの巨大な大地に印す跡とは何とささやかなものであるか（略）これに対して大地が人間に残す痕跡は歴然たるものがある。」⁽⁶⁾メルヴィルは自然の巨大さと人間の無力さを思い、その狭間に立って苦悩する。

「お目出度い失敗」の主人公「ぼく」の叔父は10年間もの長い歳月をかけて「大水理学流体静力学装置」なる水理学と流体静力学を応用した排水装置を発明した。叔父は黒人の召使いヨーピー爺と「ぼく」を10マイルも離れた無人島へつれて行き、極秘に実験を試みる。もし成功すれば湿地や沼地を郊果的に排水して肥沃な土地に変えてしまうという画期的な機械である。しかし実験は見事に失敗する。帰途、実験に使った木箱の古鉄を売って忠実な従僕ヨーピー爺のタバコ銭を工面しようという叔父の心遣いは老黒人を感激させる。

……「まったく気の遠くなるほどになげえ歳月だった。しかしこれで万事終わった。おい、小僧、わしは失敗したことを嬉しく思っているぞ。そうだと、失敗したおかげで優しい老人になれたのだからな。最初は怖かったがの。しかし失敗してよかったのさ。失敗の神に栄光あれ！ ってとこだな」⁽⁷⁾

失敗によって「心優しい老人」になり、「ぼく」も貴重な体験をしたことで「賢明な若者」に成長できた。叔父は老衰して息を引きたる時、「失敗の神に栄光あれ！」と神に感謝しているようにみえた。機械の発明を秘密のうちに成功させて巨額の富を手に入れようと企んでいた叔父は、実験が失敗した時、傷心の余り機械装置を蹴りつけて破壊してしまう。機械の発明を夢見て成功と名声を求めながらも結局は失敗を静かに受容し、失敗を授けてくれた神に感謝したのである。この物語の転末がはっきりと示すように、メルヴィルは同時代のアメリカの「人間の未来は無限の進歩である」という前提に疑問を突きつけているのだ。

メルヴィルの文明批判はしばしば、南北戦争後のアメリカに多数あらわれた山師（confidence man）を皮肉に描き出すという形を取っている。「避雷針売りの男」がその好例といえよう。

雷鳴がひびき、稲妻が光る嵐の中を奇妙な形をしたステッキを持ったひとりの男が語り手の家を訪門する。彼がこの物語の主人公である。いかにも陰気な感じのこの「男」は家に

入って稲妻の危険性について説明を始める。自分は落雷防止のための避雷針なるものを商っている。この見本をみて1本買ってほしい。ついで注文の書類に記名してほしいと矢次ぎばやに催促する。しかし語り手はその男を「いかさま商人」と見抜き、おいそれとはその商談に応じない。男はあげくの果てに「神を敬わぬ哀れな奴」と語り手をののしり、「その不信心の思想」を世間に公表するぞと威す。しかし語り手は自分はいつも「神の御手に委せて安心立命している」と述べてこの詐欺師的な避雷針売りの男を追い返してしまう。

人間の恐怖心につけ込んで儲け商売をする行商人の姿がこの男を通してユーモラスにそして軽妙に描かれている。徐々に拡大していた当時の商業主義の一端を代表するこの行商人の姿は、まさに現代の押し売りセールスマンをも彷彿とさせるものがある。

このようにメルヴィルは19世紀の技術文明や人々の拝金根性をユーモラスにあばき立ててきた。しかし、時代がその繁栄の為に社会の弱者を平然と犠牲にする時、作家の筆はゆとりを失いその告発は苛酷さを増す。

「乙女たちの地獄」の語り手「私」は種子販売人である。最近商売繁盛のため種を入れる小封筒が年間数十万個も必要となった。そこで大量の紙を購入するためにニュー・イングランドの山岳地帯にある製紙工場を訪ねる。そこは工場主と若い監督を除けば全て未婚の女性（乙女）ばかりで、彼女たちは無言のまま紙の製造に従事している。蒼白で無表情な彼女たちの顔は異様にみえた。

誰一人として声を出すものはいない。聞こえてくるものといえば、鉄の動物たちの低く、絶え間なく発せられる威圧的な呻り声だけであった。この工場からは、およそ人間の声なるものは追放されてしまっているのだ。機械——人類の奴隷として大げさに褒めそやされてきた機械が、ここでは人間たちを召使いにして使用していた。そして人間たちは、あたかもサルタン王に仕える奴隷のように、無言のうちに畏縮しながら機械に奉仕しているのだ。ここで働いている娘たちは、機械全体に付いている歯車というよりは、むしろ単なる歯車の歯のような感じだった。⁽⁸⁾

「私」はまるで「鉄の動物に餌をやっている」ような女工たちの姿に衝撃をうけて商談を終えるとこの工場の内部を見学したいと申し出る。最初に案内されたのは「ぼろ切れ部屋」といわれる所で布切れを糸屑に変える部屋であった。女工たちは「飼葉格子に繋がれた雌馬」同然に列をなして作業をしている。部屋の中には「有毒の粒子」が飛んで彼女たちの肺の中に吸い込まれていく。「私」はぼろ切れを切る剣をさながら彼女たちの首を斬る剣と重

ね合わせ、砥石で研ぐ情景を目にして「彼女ら自身の死刑執行人ども」であると思う。

次に案内されたのは1万2千ドルで購入したというこの工場自慢の機械装置を備えた部屋である。案内人が9分間の製造過程を経てパルプから紙が出来上ると説明してくれるので「私」はさっそく実験してみた。そして原料を入れて一枚の大判洋紙が完成するまでに9分間であることを確認する。

一瞬、奇妙な感情が私を支配した。それは、人がなにか神秘的な予言の実現を見て経験するものに似ていなくもなかった。しかしそれにしても何という不条理な、と私はふたたび思った。あれはたんなる機械にすぎぬというのに、その本質が一秒の狂いもない時間の正確さと精密さであるとは。⁽⁹⁾

一秒たりとも狂いのない機械の奴隷となって働く乙女たちの物悲しい表情を後に「私」は「デビルズ ダンジョン悪魔の土牢」を後にする。

「アメリカ版女工哀史」ともいわれるこの物語は19世紀中葉のニュー・イングランドにおける女工たちの生活を描いたものである。過酷な条件の下で無抵抗のままに非人間化してゆく独身の女工たちが命を縮めるという悲劇的な状況と対照的に、彼女たちの犠牲の上に巨大化していく企業とそれを容認する当時のアメリカ社会をメルヴィルは痛烈に批判している。まさに資本主義批判、アメリカ文明告発といっても過言ではない。事実、当時拡大しつつあった大量生産による製造方式は必然的に工場での機械生産を促進させ、独身の女工たちがその犠牲を強いられることになったのである⁽¹⁰⁾。

杉浦銀策氏はメルヴィルがこの物語の語り手を「種屋」に設定したことに注目して次のように述べている。

「……作者メルヴィルが語り手を、大量の紙封筒を使用する「種屋」に仕立て上げたというのなかなか示唆的である。種屋がアメリカ全土にばらまく種からはさまざまな草木や草花、野菜が芽を出すだろう。だが彼は同時に大量の紙の購入契約を結ぶことによって、製紙工場に象徴される現代文明の非人間化の傾向を促進させる張本人でもあるのだ。つまり現代的非人間化の状況の「種を蒔いて」いるのである。⁽¹¹⁾

M. フィッシャーはメルヴィルを機械文明に対する恐怖をいち早く警告した作家であるとして、「メルヴィルにとって機械文明との遭遇は人類の終焉を予期するように思われた」⁽¹²⁾とまで述べている。

五篇のうちでは最も後に書かれた「鐘塔」では人間の身のほど知らずな拡大欲がたとえ話風に描き出される。

「鐘塔」の主人公バンナドンナはルネッサンス期のイタリアの建築家である。彼は国家の要請を受けて高さ300フィートもある時計仕掛けの鐘塔を建てることになった。この仕事は彼の野心と誇りの結晶であり、作業は極秘のうちに行われる。しかし完成を目の前にした前日、自ら造った機械人形（ドミノ）によって殺され、やがて鐘塔も地震のために崩壊する。天才建築家といわれるバンナドンナが自ら造った作品によって打倒されるという皮肉な話によってメルヴィルの意図するものをさぐってみたい。

ヨーロッパ唯一といわれるほどの才能と情熱、そして野心を合わせもつバンナドンナは当代随一の鐘塔を建造するつもりであった。一つの建物の中に鐘塔と時計台を結合させることは当時としては初めての試みである。彼は「^{たいまつ}松明、^{のろし}いや烽火」の如き誇りをもって着々と建築を進めていく。

毎日石工たちが帰ったあと、いつも日暮れどきになると、この建築師は不断に高くなってゆく塔の頂きに独り立っては、都の城壁や樹木を遙かに圧する高みに立っている自分に気づくのであった。彼はそこに遅くまで残り、それとは別のさらに高い建造物の設計に我を忘れた。⁽¹³⁾

そして塔の完成を祝う当日、地上300フィートの手摺もない止り木の上に一人腕を組んで立つバンナドンナの姿に、人々は称賛の声を惜しまない。このために彼の自尊心は一層強くなる。次の作業である鐘の建造に移り、鐘の重さについて制限を加えるべきであるという周りの警告も彼にとっては馬耳東風同然である。巨大な鑄型に流し込まれた金属がまるで「猟犬のように吠え立て」る仕事場で恐怖のあまりおじけついた職人の一人を、彼は狂ったように柄杓で殴り殺してしまうという事件がおきた。しかし彼の殺人行為は「^{ひしやく}審美的情熱から突発的に生じた忘我状態」によるものとして見逃されてしまう。芸術のためとはいえ、人間としての常識を逸した行為を容認されることによって、彼の傲慢さは止むことを知らない。

彼の創造による時計の文字盤は12人の乙女がコーラスの輪をつくって鐘のまわりを踊っているもので、12種類の文字を擬人化してある。明日の一時、最初に打つことになっている「ウナ」の顔の表情が他の乙女と違って何か「不吉な宿命を漂わせている」ことに疑問をもった執政官に対して、バンナドンナは「芸術にはある種の掟」があると答える。その掟とは芸術には「複製物」が許されないこと、それ故に「微妙な個性」が生じるのであり、「ウ

ナ」の表情、特にあの眼差しは自分にとってむしろ満足すべきものであると説明する。

しかし午後一時、市民たちの注目の中で起ったことは期待された鐘の音ではなく、突然鐘撞き堂から何かが落ちてくる鈍い音であった。

バンナドンナが乙女たちや花環の模様で飾られた鐘のそばで平伏し、血を流しながら横たわっているのだ。彼は〈ウナの時刻〉の足下に倒れ、その頭部は、〈ドゥアの時刻〉の乙女によって堅く握りしめられていた、ウナの左手の真下のあたりにあった。⁽¹⁴⁾

誰も予期せぬ事故であった。彼は執政官に指摘された「ウナ」の表情を内心では気にかけていて、その表情を修正しようと更なる完璧を目指して最後の仕上げをしている最中の事故であった。

……仕上げの間、彼は自らの被造物のことをすっかり忘れていたのだが、一方、被造物の方は彼のことを忘れることなく、また自らの存在の目的とねじ仕掛けに忠実に働き、定刻に自分の持ち場を離れ、十分に油を注がれてある軌道に沿って音もなく目標に向かって滑り出したのだ。そして轟々たる音を響かせようとウナの手を狙いつつ、その間に介在し、後ろ向きになっていたバンナドンナの脳髓を鈍く打ちのめし、手枷を掛けられた両腕は忽ち高く舞い上がったまま宙に浮くことになってしまった。そして倒れかかった屍体に退路を塞がれ、あたかも死後の恐怖を囁いているかのように、なおもバンナドンナの上ののしかかるようにして立ち尽していた。⁽¹⁵⁾

バンナドンナの造った鐘撞き人形は彼の芸術家としての創意を凝らした至高の作品であった。しかし時計の本質はその「時間の正確さ」にある。その本質に忠実に動いたが故に彼はその犠牲となったのである。彼の亡き後この鐘は改鑄され、一年後に落成記念日を迎えることになるのだが、奇しくもその日起きた地震によって崩れ落ちその残骸をむなしく晒すことになる。

こうして盲目の奴隷がさらに盲目的な主人に従い、しかもその服従のうちに主人を惨殺してしまった。またこうして創造主が被造物によって殺害されることとなった。それにまた鐘は塔にとって余りに重すぎたのである。鐘の主な欠陥はというと、人間の血のために出来た瑕にあった。驕傲は滅亡に先立つ、とはまさにこのことであった。⁽¹⁶⁾

こうしてバンナドンナの野心はあっけなく崩壊する。鐘塔が大地の怒りともいべき地震によって崩壊したことは意味深い。彼の芸術的才能に対する自負の念は自惚れに変わり、その意図するものは次第に大胆不敵なものになっていった。鐘撞堂に移動能力をもつ時計盤を造ろうと思ったとき、彼は次のように考える。

もしそうした被造物が出来上がれば、それは六日間におよぶ神の御業をすら補いかねないものとなり、この地上に新たな奴隷、つまり雄牛よりも役立ち、^{いるか}海豚よりも敏捷で、ライオンよりも力強く、猿よりも狡猾で、蟻に等しい勤勉さを有し、毒蛇に優る猛毒を持ち、しかもなお忍耐力において^{るば}驢馬にも等しい新たな奴隷を産み出すことにもなるだろう。ここにおいて、人間に仕えるあらゆる神の被造物のあらゆる卓越した素質がさらに進歩の度を加え、しかるのちにそれらの要素がすべて結合されて一個の存在と化してゆくはずだった。すべてが完結した暁には、そのヘロットはタロスと名付けられ、タロスはバンナドンナの鉄製の奴隷、また彼を通して人類の奴隷となるはずのものだった。⁽¹⁷⁾

彼の自我は拡大して止むことを知らず、ついには自然を我が物にしようという妄想にかられる。

彼にあっては常識が魔術であり、機械装置が奇蹟であった。彼にあっては、プロメテウスとは機械師を表わす英雄の名前であり、人間とは真の神の別名なのである。⁽¹⁸⁾

バンナドンナの悲劇は人間が神と同等、又はそれ以上のものであると信じる傲慢の罪に対する神の報復とは考えられないだろうか。おもえばソポクレスの『エディプス王』以来英雄的な人間の悲劇的欠陥は常に *hybris* (傲慢) であり、メルヴィルがエイハブやピエールの造形を通じて追求したのも、人の *earth-bound* な本性と *heaven-aspiring* な傾向との相克であった。この作品ではプライドは悪と断罪されている。

以上五つの短篇を年代順にみてきた。「コケッコー！」では鉄道や蒸気船の発達とそれに付随して起る事故を嘆きその犠牲者に同情し、「お日出度い失敗」では排水装置の発明に失敗した主人公が失敗によって遂に真の人間性に目覚める姿を描いた。「避雷針売りの男」では訪門販売に代表される商業主義を告発し、「乙女たちの地獄」ではアメリカの典型的商業形態の一つである通信販売に言及し製紙工場で機械の奴隷と化した女性労働者の姿を暴露

した。そして最後の「鐘塔」では自ら傑作と自慢する鐘撞き時計の「正確さ」の犠牲となる天才建築家の姿を描いた。

さてここでこのようなメルヴィルの作品が生まれる土壌となった当時のアメリカの社会状況についてふれてみたい。

H. メルヴィルの生存した19世紀中葉はアメリカが国内外に大きく躍進した時代である。

アメリカは1783年ワシントン条約によりイギリスから国際法上の独立をかちとるが第二の独立戦争ともいえる対英戦争により名実ともにイギリスから一人立ちをした。そして自国の政治、経済、社会面での充実を図るべく国内にも眼を向けることになり、国外的にはモンロー大統領が1823年連邦議会に示した「モンロー宣言」により、ヨーロッパに対して相互不干渉の原理を主張し、国内的には西部、南部に新設した24の州から成る連邦政治の時代に移っていった。1824年第7代大統領に選出されたアンドリュー・ジャクソンは「ジャクソン民主主義」により国家意識を大いに昂揚させた。

1825年エリー運河の開通により「運河時代」が到来する。これは国内の流通市場に大変革を起した。又、今日のアメリカ機械文明にとって重要な源流ともいえるホイットニーの綿織り機の発明と大量生産方式の開発は、紡績機械、農業機械、そして蒸気機関の発明を促がし、鉄道の発達にも影響を与えた。

西部の開拓と産業の発達により陸上交通である鉄道も発達し、1830年代から東部各地に敷設された鉄道は1850年代には中西部や南部の主要都市間にも及び、更に南北戦争の影響により鉄道建設は一層拍車がかげられた。そして1869年大陸横断鉄道が開通した。

鉄道と共に西部開拓の原動力となったのは蒸気船である。1807年、ロバート・フルトンがハドソン川に初めて蒸気船を浮かべ、続いて1812年、ニコラス・ルーズベルトは、ミシシッピ河に蒸気船を走らせ、ニュー・オルリンズに到着した。

この時期、西部開拓史上、忘れることのできない出来事が起った。1848年、極西部に住む大工のジェームズ・マーシャルがアメリカン川からひいた溝に黄金の砂を発見すると、一攫千金を狙った人々——1849（フォーティ・ナイナーズ）——がカリフォルニアの金鉱を目指して集まってきた。有名な“Gold Rush”である。この金鉱発見は、西部へと向う膨張熱を一層高めることになった。

このような西部の開拓と産業の発達は、少なからず文学にも影響を及ぼすことになった。ホイットマン、ホーソン、メルヴィルはまさにこの時代を担った作家である。彼等は三人三様の形でアメリカ社会をあるいは讚美し、あるいは批判した。ホイットマンが楽天的に現実を肯定したのに比べて、ホーソンは科学文明に象徴される人間の完全性を志向する態度に対

して否定的であり、人間の内面に巢食う悪の源を忘れることで起る悲劇をくりかえし描いた。

文明の進歩とは本来、人類に幸福をもたらすことを目的としている。しかし当時のアメリカは無条件にこの進歩を肯定する傾向があり、メルヴィルはこのような風潮に対して懐疑的であった。この点でメルヴィルにはホーソンに相通じるものがあった。「メルヴィルは気質において骨の髄までピューリタン」⁽¹⁹⁾であったとはよく言われる。メルヴィルは当時の社会背景の根本思想であるピューリタニズムを土台とする保守的な家庭に育った。しかし1856年10月、精神的な危機にあって、メルヴィルは聖地を旅して信仰を確立するために巡礼の旅に出る。その途中、リヴァプールでホーソンに逢うが、その時のメルヴィルの様子について次のように記している。

“He can neither believe, nor be comfortable in his unbelief; and he is too honest and courageous not to try to do one or the other.”⁽²⁰⁾

メルヴィルは信仰を持つこともできず、不信仰の中で心安まることもできず、その狭間で苦しんでいた。激しく神を求めながらも一方では自己の内面にしか真実を求め得なかった。つまりピューリタニズムの中にあって神を信じることも、さりとは離れることもできず、彼の気持は不安の中にあった。まさに熱烈な求道者、熱烈な不信仰者と呼べよう。

キリスト教によって人間は神を求める自由を与えられた。しかし反面、精神の自由は人間の主体性を目覚まさせ、自らの無限の可能性への楽観をも招く。人間は自らを神と同レベルに置き、人間神化という錯覚に陥る可能性を常に持っている。さきに述べたように、人類に真の幸福をもたらすべき文明の進歩は往々にして自然征服を意味し、ついには地球の破壊をまねく危険をも生じた。非人間的な科学技術への盲信に対するメルヴィルの反論は、まさに現代の我々がかかえているテーマでもある。

19世紀中葉にあって、物質主義に毒され、人間存在の本質を見失いがちな人間の姿をいち早く感じとり、文明批判にはじまって野心や向上欲といった人間の本質的な悲劇をあばいてみせたメルヴィルは、実に現代的な作家であるといえよう。

注

- (1) 坂下昇訳、『メルヴィル全集 8, 白鯨下』(国書刊行会, 1983), p. 214.
- (2) これらの短篇はいずれも1853年から1855年にかけて月刊雑誌、『パトナムズ誌』と『ハーパース誌』に掲載された。
- (3) 杉浦銀策訳、『乙女たちの地獄』I, (国書刊行会, 1983), pp. 145-146.
- (4) 鍋島能引, 酒本雅之訳『草の葉下』(岩波書店, 1979), p. 216.

- (5) 杉浦銀策訳、『乙女たちの地獄』Ⅰ, p. 146.
- (6) _____, p. 144.
- (7) _____, p. 284.
- (8) _____, p. 244.
- (9) _____, p. 251.
- (10) 日本における女工の悲惨な姿を描いた細井和喜蔵氏は次のように述べている。
工場とはいかに衛生設備をよくしたとて、時間を短くしたとて、結局非衛生で生命の消耗所であることを免れない。従ってそこで働くことは決して面白からうはずがない。労働とは永遠に苦痛と嫌厭の連鎖である。某外人の言ったごとく実に工場は「緩慢なる殺人剤」でなくしてむしろ屠殺場なのである。
細井和喜蔵、『女工哀史』, (岩波文庫, 1992) pp. 399-400.
- (11) 杉浦銀策訳、『乙女たちの地獄』Ⅱ, p. 279.
- (12) 但しフィッシャーのコメントは中村紘一氏の『メルヴィルの語り手たち』, (臨川書店, 1991) p. 215. から引用した。
- (13) 杉浦銀策訳、『乙女たちの地獄』Ⅱ, p. 136.
- (14) _____, p. 149.
- (15) _____, p. 155.
- (16) _____, p. 156.
- (17) _____, p. 152.
- (18) _____, p. 153.
- (19) 寺田建比古, 『神の沈黙』, (沖積舎, 1982), p. 66.
- (20) Quoted by William Braswell, *Melville's Religious Thought*, (New York: Octagon Books, 1977), p. 3.

尚、本文中の註以外の引用は全て杉浦銀策訳『乙女たちの地獄』Ⅰ, Ⅱを使用させていただいた。

参考文献

- ① Louis J. Budd and Edwin H. Cady, *On Melville*, (Durham and London: Duke University Press, 1988)
- ② ランダル・スチュアート著, 刈田元司訳, 『アメリカ文学とキリスト教』(北星堂, 1958)
- ③ ヴァン・フィッグ・ブルックス著, 石川欣一訳, 『メルヴィルとウィットマンの時代』Ⅲ, (ダヴィッド社, 1954)
- ④ 『ユリイカ——詩と評伝』第9巻4号, (青土社, 1977)
- ⑤ レオ・ヒューバーマン著, 小林良正, 雪山慶正訳, 『アメリカ人民の歴史上, 下』(岩波新書, 1991)
- ⑥ 大橋健三郎, 『鯨とテキスト』(国書刊行会, 1983)
- ⑦ 神原達夫, 『孤独な遍歴——ハーマン・メルヴィル考——』(こびあん書房, 1975)
- ⑧ 酒本雅之, 『沙漠の海——メルヴィルを読む——』(研究社, 1985)
- ⑨ 猿谷要, 『物語アメリカの歴史』(中央新書, 1991)
- ⑩ _____, 『アメリカ歴史の旅』(朝日出版, 1992)
- ⑪ 杉浦銀策, 『ハーマン・メルヴィル——破滅への航海者——』(冬樹者, 1981)
- ⑫ 林信行, 『メルヴィル研究』(南雲堂, 1982)
- ⑬ 浜野成生, 『アメリカ文学と時代変貌』(研究社, 1992)
- ⑭ 福田陸太郎, 『アメリカ文学思想史——社会と文学——』(中教出版, 1977)